

1962年8月、初めて高知県外：信州のチョウを楽しむチャンスを作ってくれたのが下諏訪市の津田進さんであることを生きたクジャクチョウとの初めての出会いの項でも触れているが、霧が峰高原に案内してくれたとき、和田峠や七島八島湿原周辺でやたらと目についたのがスジボソヤマキチョウであった。高知市で見られるどのシロチョウ族よりも一回り大きく、前後翅ともに先端部が図鑑で知るとおりの状態に尖っており、黄色い翅表に濃いオレンジの紋が鮮やかなスジボソヤマキチョウはとりわけきれいで、それが花蜜を求めて飛び交っている光景はさすがにチョウの宝庫：信州にきたのだとの思いを強くしたものだ。淡い緑色を帯びた純白色のメスではことさらオレンジ紋が映えてとても新鮮にみえた。当時はほとんど砂利道を徒歩で探索したわけで、路傍に多くのチョウを見たのだが、ビーナスラインなど観光のための舗装道路が完備されて以降、チョウが激減したように思われて残念だ。1986年8月、千葉の親類と女神湖湖畔キャンプを含む信州ドライブ旅行を楽しんだとき、麦草峠から松原湖へと下る途中で白樺の広大な自然林に遭遇し、のんびりとネコたちを遊ばすこともできる適度な草原もあって、子供たちにはスジボソヤマキチョウとの追いかっこを楽しんでもらったのだが、2007年に再度訪れた際、その場所が私的開発にあってゴルフ場などのレジャーランドと化して、楽しい時間を過ごした白樺林の自然美が失われてしまっていたのはショックであった。



Aug.4,1962 長野霧が峰和田峠
スジボソヤマキチョウ♂



Aug.4,1962 長野霧が峰和田峠
スジボソヤマキチョウ♀

話が前後するが、1981年10月に家族でハイキングを楽しんだ相生市三濃山の山頂近くでスジボソヤマキチョウが風に流されるように飛んでゆくのを目撃して、兵庫にもいることを知る。その後、2005年10月8日、兵庫県佐用町でもあまり標高の高くない位置の草原でスジボソヤマキチョウをみかけ、急ぎカメラをもって忙しい吸蜜飛翔をフォローし続けたが、とうとう撮影チャンスをくれないまま飛び去られてしまっている。

スジボソヤマキチョウは近縁種のヤマキチョウとともに成虫越冬することが分かっているが、なぜかスジボソヤマキチョウだけが越冬後に翅裏面にシミなどの汚点がめだつなど汚損する個体が多いという図鑑記載があるが、1997年4月に松本市浅間温泉近傍でまさにそういう姿をまのあたりにして、セイヨウタンポポを訪れた汚損個体のビデオ記録をしている。ところで、チョウを標本化したあとチョウの体から染み出したと思われる油性成分がきれいな鱗粉色を完全に消してしまう現象があって、スジボソヤマキチョウでも起きる。この現象はブルーの金属光沢の美しさでもあまりにも有名な南米産モルフォチョウ類で著しいことが知られていて、モルフォチョウの標本でこの不都合を避けるためには尻尾部分を切り取ってしまうといいことも分かっているが、日本産で同様の油性成分が翅の美しさを消してしまう例をテングチョウ、リュウキュウムラサキ、ウラギンシジミ、ムラサキシジミなどでも経験している。筆者はこの現象が標本管理のために標本箱に入れるパラジクロールベンゼンなどが誘引している可能性もあるのではないかと考えているが検証はできていない。

なお、本種は花蜜や路面での吸汁中に開翅する習性がないため美しい翅表を見る機会が少なく、2014年7月に長野県下伊那郡大鹿村で撮影したビデオ記録から切り取った静止画像を示す。

